《 第８回　日韓国際学術会議シンポジウム 》
――「安重根国際平和賞受賞」＆「安重根東洋平和研究出版」記念――

植民地支配責任を問う ソフトパワーの力
～文学と演劇から～

＜第１部　シンポジウム＞

【発表１】「夏目漱石と植民地支配―安重根の話題などをめぐって―」

報告者　金 正 勲（キムヂョンフン）　全南科学大学副教授

コメンテーター　田口　律男　龍谷大学経済学部教授

【発表２】「演劇『寒花』における安重根像―芸術の平和貢献」

報告者　西川　信廣（にしかわ　のぶひろ）文学座演出家

＜第２部　　研究成果　刊行報告＞

『安重根・「東洋平和論」研究　21 世紀の東アジアをひらく思想と行動』
龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター・李洙任教授退職記念刊行委員会編

2022 年　2／16（水）　14 時～17 時半

龍谷大学響都ホール校友会館（京都駅八条口　アヴァンティ9F）

◎参加申込方法は裏面をご覧ください。オンライン（ZOOM）参加も可能です。

＜主催＞
龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター
（社）安重根義士崇慕会、安重根義士紀念館（韓国・ソウル）
＜協力＞　龍谷大学図書館、立命館大学コリア研究センター、笹の墓標展示館再生実行委員会、NPO 法人猪飼野セッパラム文庫、コリア NGO センター、アジェンダ・プロジェクト（2022 年 1 月 11 日時点）
＜管理運営＞　第8回日韓国際学術会議・合同準備委員会　（問い合わせ　anjukon1910@gmail.com）

＜シンポジウム開催趣旨＞

　このシンポジウムは、「慰安婦」問題や徴用工問題などで関係改善の出口の見えない日韓関係を、市民サイドから「ソフトパワー」の力で改善の糸口を探る取組みとして開催します。

＜報告者プロフィール＞

◆金 正勲（キムヂョンフン）

1962 年韓国生まれ。韓国・朝鮮大学校国語国文学科を卒業後、日本に留学、関西学院大学大学院文学研究科で学び、博士学位取得。韓国の視点から日本文学を読むことに励み、さらに文学の社会的役割を意識しつつ韓日文化の懸け橋になる活動に専念している。現在、全南科学大学校副教授、中央大学政策文化総合研究所の客員研究員歴任。著書に『漱石と朝鮮』(中央大学出版部)、『漱石　男の言草・女の仕草』(和泉書院)、『戦争と文学　韓国から考える』(かんよう出版)、訳書に『私の個人主義　他』(チェク世上)、『明暗』(汎友社)、『戦争と文学―いま、小林多喜二を読む』(J&C)、『花岡事件回顧文』(ソミョン出版)など。

◆西川信廣（にしかわ のぶひろ）

1949 年、東京生まれ。文学座附属演劇研究所 16 期、1981 年座員となる。
1986 年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてイギリスに滞在。
1984 年文学座アトリエの会『クリスタル・クリアー』で文学座初演出。
1992 年文学座アトリエの会『マイ チルドレン！マイ アフリカ！』にて紀伊國屋演劇賞個人賞、芸術選奨・文部大臣新人賞。1994 年文学座公演『背信の日々』ほかで読売演劇大賞優秀演出家賞。
劇団公演以外にも、『黒皮の手帳』(明治座)・『マイ・フェア・レディ』(東宝)などの大劇場作品から、再演を重ねる『てけれっつのぱ』『しゃぼん玉』(文化座)、『真砂女』(朋友)、『十二人の怒れる男たち』『音楽劇わが町』『音楽劇人形の家』(以上俳優座劇場プロデュース)など幅広く活躍。岐阜県可児市にスタッフ・キャストが滞在して立ち上げる地方発信型の公演「アーラコレクション」シリーズでも、『エレジー』『黄昏にロマンス』『すててこてこてこ』などを演出。
2022 年演出作品『夜の来評者』(俳優座劇場プロデュース)『田園１９６８』(文学座)
新国立劇場理事。新国立劇場演劇研究所副所長。東京藝大・非常勤講師・評議委員。日本劇団協議会会長。日本演出者協会理事。

◆【『寒花』（作／鐘下辰男　演出／西川信廣）】

中央：旅順監獄での安重根
（文学座公演『寒花』より　写真撮影：宮川舞子）

「寒花」とは雪や氷を花に例えた表現。伊藤博文を殺害し旅順監獄に収監された安重根と、安の死刑執行のため日本から派遣された外務省高官や典獄をはじめとする日本人とのかかわりを舞台化。

＜劇評＞

・中央のエリートと現場との摩擦といった現代につながる官僚体質や、当時の日本とアジア諸国との関係を想起させる「力の支配」の非人間性などが浮かび上がる。(朝日新聞)

・鐘下は、明治維新から日本で続く東国人と西国人の確執、エリートと非エリートの対立などをあばく「装置」として安を据えた。(毎日新聞)

・鐘下は、登場人物のひとりひとりを鮮やかに描きわけたが、西川信廣の演出がまたみごとで、暗い緊迫感が終始とぎれない。それなのに、どこかさわやかな抒情が漂い、希望の灯がかすかに見えるような気がする。これは鐘下の持ち味であり、西川演出の特色でもある。二人の個性がうまく重なって、ふしぎな感動が残った。(演劇界)

・体面にこだわり、強権を発動する様は現代の総会屋問題にも通じる。悟ったかのように、死を静かに受け入れる安は周囲の狂騒を明瞭に浮かび上がらせた。(読売新聞)

・(日韓関係が悪化して厳しいさなかに)・・・改めて考えさせられることが多い。中でも大事なことは、日韓関係の今後のためにはまずわれわれが、つまり日本側が、姿勢を正すべきだということを痛感させられることではないか。(朝日新聞)

＜参加申込方法＞

会場参加、オンライン参加を問わず、参加をご希望の方は、右の QR コード、もしくは下記よりお申込みください。
https://forms.gle/PVm7kzcbq38yBB6W6

※会場参加の場合は、感染予防(マスク着用等)対策をお願いします。また発熱など体調不良の場合には入場をお断りすることもありますので、ご承知ください。

＜問い合わせ＞　anjukon1910@gmail.com

新刊　安重根・「東洋平和論」研究
21 世紀の東アジアをひらく思想と行動

　朝鮮植民地化を推進した伊藤博文を殺害した安重根はテロリストなのか、英雄なのか。多文化がともに暮らし、永遠平和を目指したヨーロッパをモデルに、韓国・日本・中国の連携による東アジアの平和を志向し、世紀をこえて生きる続ける安重根の思想と行動とは…
（明石書店　2022 年 1 月）